

韓国のお産文化

Korean culture related to childbirth

李 善 愛

韓国政府は10年余り前まで、「子供は男の子、女の子区別なく二人だけ産んでよく育てよう」という二人子政策を国民に勧めてきた。そして、今は子供は二人のみ産むのが常識となっており、兄弟が5女1男、6女1男などのように多いと珍しく思われている。これは子たくさん儲かるのを望んだの結果であろうが、多くは家を継ぐ男の子を産むため、肉体的、精神的、経済的負担をかかえながら子供を産み続けた結果であると思われる。韓国人の男児への選り好み度が高いのは、胎児の産み分けを手助けして検挙された医者の記事が毎年、マスコミを通して世間を騒がせることから十分裏付けることができよう。本稿では、男児信仰にまつわる韓国のお産文化を通して今昔における生命観の変化についてうかがうことにする。

キーワード：男児信仰、胎夢、三神、産着、三七

目 次

I はじめに	2 三神信仰と注連縄
II 韓国のお産の事例	3 子供の成長の区切り
III 胎夢による胎児の性別占い	V 男児信仰にかかわる習俗
IV お産のしきたり	VI おわりに
1 出産前後の禁忌事項	

I はじめに

韓国では、子供は一姫二太郎が理想とされている。女兒は家事を助けてくれるし、暮らしの元金になるが、結婚すれば「出嫁外人」になる。しかし、男の子は両親の老後の面倒をみたり、祖先代々の祭祀を行うことができるから男児に比べると、女兒はそれほど重んじられない。医療技術によって胎児の性別がわかるようになり、そのために女兒が中絶される事態が社会問題化されるのも、男児選好の極端な例といえるだろう。このように今も根強い男児選好の傾向は、男児信仰とも言い換えることができる。本稿では、韓国の男児信仰について、その背景にある韓国のお産文化の一側面と変容について慶尚南道蔚山地域(図1)の事例^(註1)を中心に紹介したい。

II 韓国のお産の事例

お産にまつわるしきたりは地域によって様々である〔ジュディス・ゴールドスミス 1997〕。ここでは出身地はそれぞれ異なるが、現在、蔚山市に住んでいて出産の経験のある女性10人と出産の経験のない女性1人を含めた11人の女性の妊娠と出産に関わる事例を年齢順に見てみよう。

<事例1>

金粉玉は1937年生まれのプロフェッショナル主婦で、慶尚北道慶州出身である。長女の胎夢は、赤色の柿の木を枝ごとに切ってスカートに包む夢を見た。長男の息子の胎夢は夫が長男の結婚式の前晩にみた。夫が仕事を終えて家に帰るとき、隣の家のブタ小屋から黒いブタが出てきて親指を噛みついてなかなか離さない夢を見た。夫は不思議に思い、五歳上のお姉さんに夢の話をする、お姉さんは男の子を産む胎夢だと言った。長男は結婚してすぐ男の子が生まれた。

つわりが始まった時は、重いものは手に持たない。平らな所に座り、傾いた所は座らない。カニを食べるとカニのように唾を出し、タコを食べると子供に骨が生じない。アヒルの肉を食べると水掻きのような手足になるから食べない。昔は迷信が酷くて妊婦が薪で煮炊きをするとき、背負子の杖を火掻きすると兎口の子が産まれる。

安産するためにはよく働き、漢方薬を飲む。陣痛が始まった頃、産婦の頭を洗わせてたり、生卵を飲ませたりする。頭の毛や卵のようになめらかな子供が産まれるからである。また夫が負んぶしてあげる。産婦のお腹に刺激を与えると安産するからである。

産後は生き物を殺さない。長男を産んでから貧血があり、ヤギが女性の身体によいと言われたので二番目の子を産んでから飼っていた子ヤギを殺して食べた。それから全身が痛くてひどい熱が出て、子ヤギの四つ足を夢によく見たので姑が占い師に聞いたらヤギは妖物な動物なので、出産後三週間が過ぎるまで殺すと産婦が死ぬと言われた。そのため、占い師を呼んで餅やおひたしなどを三神に供えて愚鈍な衆生が知らなくてやったので洗い上げたように治らせてくれるよう願った。それから痛みがなくなった。

似た例は、相嫁は身体が弱かったので子供を容易に産ませるため飼っていたヤギを殺して陣痛が始まったとき食べさせたら子供を産んでから死んでしまった。そのため、子供を産んで三週間の間は絶対生き物を殺してはいけない。また、焼いたり揚げたりしない。三番目の子を産んで一週間も過ぎない頃、亡くなった舅の祭祀があった。祭祀のための供え物の準備は相嫁がしてくれた。その時、供え物の魚は焼かず蒸すように頼んだが、相嫁は祖先を祭る場だから構わないと私のお話を聞かず魚を焼いた。それから子供のお尻にできものができ、姑が水で不浄を清めて謝ってもなかなか治らず未だにその傷後が残っている。家族は葬式に行かない。子供を産んで三日目に夫が葬式に行ったら子供が目を閉じて泣き始め、乳も飲まなかったので三神に水を供えて不浄を清めてもらった。

また、産後は竈の灰を掃除したり、空釜をなおしたり、食べ物あげたり、炒めたりしない。その上、子供にぼちゃぼちゃと太ったと言わない。

ワカメスープは血行の循環をよくする作用があるので三週間食べる。その時まで三神お婆(産神)に茶碗一杯の米と水、干したワカメ、糸を供えておき、一日三回白ご飯とワカメスープを供えて子供の万福と無病長寿を願う。三神膳に供えたワカメは一週間おきに手でとり、ワカメスープにした。鋏や包丁を使うと、子供の寿命が短くなるので使わない。三週間後は三神膳を片づけ、米は炊いて産婦に食べさせ、水はきれいな場所に捨てる。母乳の出がよくなるからである。

注連縄は舅か夫がかける。男の子は注連縄に赤色のトウガラシ、炭、青松の枝を三つずつ挿してかける。女の子は炭と青松の枝を三つずつ挿す。昔は癩者が多かったのでそういう不浄な人が家の中に入って来るのを防ぐためであった。

一番目の子が男の子だったのでその子に初めて着せたうぶぎは、昔、科挙の時に畳んで懐に入れて行ったり、裁判の時に片っ方の足袋とともにかまどの前にかけておいたりすると縁起がよいと言われたので大切に保管しておいて息子が受験に行くときカバンの中に入れてあげた。人によっては祖先代々に保管して置いて受験や裁判の時使う。産婆は金持ちの家が難産の時呼んだ。

近所の人で女の子6人を産んでも後継ぎの男の子が生まれなかった。念願の男の子を産むため寺に行って百日間、祈願をし、一人の男の子が生まれたので寺に米10表のふせをした。男の子を産むためには夫婦ともに高麗人参をよく飲めばよい。また、市が立つ最初の日に市場に行って赤色の下着を買って着ると男の子が生まれる。あるいは男の子を多く産んだ婦人下着を盗んで着る。

<事例2>

黄順徳は1938年生まれのプロ主婦で、江原道旌善出身である。友達は17、18歳に結婚したが、彼女は一人子だったので22歳で結婚した。彼女は昼寝をするとき胎夢をみた。長女の胎夢は、夫が漁から一匹のウナギをとってきた。しかし、私がそのウナギを持ち上げたら大きな青大将で、少しも恐がらずスカートに包んで部屋に持ってくる夢だった。そして、私も知人も皆必ず男の子の胎夢だと思っていたが、女の子でがっかりした。

息子は二人とも果物の夢をみた。実家の近所に大きなモモがふさふさとなっているモモの木をモモ一個も落とさず木ごと盗んでくる夢をみた。次女はブタ小屋に行ったら飼っていたブタが子豚を五匹産んでいた。しかし、母ブタが子豚を食おうとしたので子ブタ五匹を木箱に入れて持ち出そうとしたら母ブタが私の肩を噛みつく夢をみてびっくりして起きた。男の子の胎夢だと思っていたが女の子だった。四人の子を産んでから当時の二人子政策により、保健所から時々婦人たちが来て教えてくれた周期別の産児制限法をしたが、うまくいかずループで避妊を始めた。

出産後、母親が三神膳に水を供え、初めてのワカメスープは三神に先に供えてから産婦に食べさせた。ワカメスープは血行がよいからである。当時はワカメが手に入りにくかったので五日間

しか食べられなかった。それからはキムチでご飯を食べ、口の中が火照った。三神膳は三週間祭る。その一週間目には三神膳にワカメスープとご飯を供えておいた。

子供を産んでから家族は葬式に行つてはいけない。子供が不浄のため祟るからである。傷んだ果物やご飯は食べない。当時は貧しかったので食べ物傷んでも捨てず水で洗って食べた。それを食べると乳が悪くなって子供によくはないからである。海苔や魚を焼かない。子供の身体にできるものからである。それは三神に水を供えて願うと自然に治った。産後、一ヶ月間はお風呂に入らない。冷たい水に手を入れない。産婦の身体によくはないからである。

鉾山があるところで飲食店をしたので子供が生まれても注連縄をかけなかった。注連縄をかけると客がこないからである。当時の店は台所の出入口が道端の方に向けていたので出産日の早朝、喪主の客が身体を暖めるため台所に入ってきた。母親はその喪主を子供が生まれたのを理由で帰らせた。しかし、不浄のため祟ったのか子供が泣きだして百日間夜明けまでなき続いた。

胎盤は母親が竈で数日間焼いてきれいに保管しておいて、子供の胎熱やおたふく風邪の時、それをつぶしてエゴマ油で混ぜて胎熱の所や頬にぬってあげる。人によっては燃やすとそれを癩病患者が拾って行く心配があったので全部燃えるまで見張りをした。一番目の子が男の子である場合、その子のうぶぎの結び紐は糸にして保管し、試験の時、身につけて行かせると縁起がよい。

母親はなかなか子供ができず、名山の谷間で七元星君に祈祷して私ができる。母親が山の谷間に入る日に牛と人の出産などの不浄をみて入ると山全体の木がへびに変わってうようよして水も汲めなかったという。母親が七元星君に願って私ができるので今も寺に行くと、必ず七星閣に寄る。子供ができないと、仏像の耳や鼻をさわりながら子供が授かるよう願う。

<事例3>

金慶仙は1940年生まれのプロ主婦で、慶尚南道蔚山出身である。胎夢に出てくるクリとナツメは赤色が男の子で緑色が女の子である。長男の結婚式で新婦が舅と姑に初対面の儀式を行うとき、嫁にクリ3つを投げてあげたら人々から欲深いと言われた。夢で、へびが黄色で大きかったり、身体をくるくる巻いていたり、へびに追いかけられたりすると男の子で、へびが細くて小さいのは女の子の胎夢だった。

産月に近づいてくるととても心配だった。今は病院に行って産むので心配いらない。昔は出産途中に死ぬ人が多かったので母親は出産する度に死ぬかと思ひ、出産直前にタンスの服を全部片づけておいた。流産させようとしてもうまくいかず、出産の時は命をかけたという。子供が生まれると姑が産婦のいる部屋に産神膳を用意する。産神膳は「ソン」(日にちによって四方を回りながら人間の活動をさまたげるといふ、方位祥・三隣亡のたぐいの厄神)のない方位に置いて、乾燥させたワカメ、茶碗一杯の米や水、長寿を願う糸、臍の緒を切ったハサミなどを供えておく。産神膳に供えたワカメはハサミで切つてはいけないし、水に戻して包丁で切つてもいけない。ハサミや包丁でワカメを切ると、子供の寿命が短くなるので手で切る。昔は七週間供えておいたが、

今は三週間である。

三神は灼かである。従姉妹の内、身体障害者が一人いて産まれて一週間過ぎないとき祖父が親戚の葬式に出て帰ってきたら不浄のため祟り、子供の口や手足がねじれはじめ、いくら産神に謝っても、漢方医院に行つて鍼をさしてもらつても治らなかったので、迷信は無視できない。玄関の前には不浄をはらい、清めるため舅が注連縄をかけた。災難や不浄がある人が来るのを防ぐためであり、産まれた子の性別を外部に知らせるためだった。男の子が産まれると注連縄に赤色のトウガラシと炭を三つ挿し、女の子はワカメと炭を三つ挿しておく。子供を産むとワカメを食べるので、女の子はワカメを挿す。昔も今も産後は必ずワカメスープを食べる。ワカメは血行の循環を促進して血をきれいにしてくれる。また、産後は他の食べ物よりワカメスープを飲むと口や胃に優しいからである。それに母乳の色が白くてそれを子供に飲ませると糞の色が健康できれいな黄色になるからである。

産後、3週間過ぎるまで冷たい水に手を入れず暖かい部屋で休養をとるべきであるが、姑から産婦の後腹は台所に立つと治るといわれ、出産して三日後から家事を始めた。当時は家の中に水道がなく、遠くの井戸まで水汲みに行ったり、川沿いまで洗濯しに行くのがとても辛かった。それに子供に乳を飲ませると、乳が痛かった。そのため、女子は罪深い存在である。昔話によると、ある女子が子供一人を産んでみてあまり大変だったので夫が代わりに子供を産んでくれる後妻を迎えてくれた。その後妻が一番目の子を産んだ時は、自分の代わりにご苦労だと思い、出産の世話を一生懸命にやってあげたのに、また二番目の子を産むので騙されたと思った。初めほどではないが、出産の世話をしてあげた。しかし、また三番目の子を産むので後妻は人間ではなく牛だと思った本妻は、牛の餌を作ってあげたというくらいである。

<事例4>

朴順徳は1940年生まれのプロフェッショナル主婦で、慶尚北道慶州出身である。草地にヘビがくるくる巻いているのを見てびっくりして逃げたり、クリ、サツマイモを拾ったりする夢をみると男の子を産む胎夢だった。胎夢をみるのはいつも実家に行ったときである。山に葎とりに行ったが、一つもとらず山から下りてくると、二つの山所(墓)の間にサツマイモが一カマス捨てられていた。その中から一番大きいサツマイモを二つ選んで籠にいれ、家に帰って母親に渡す夢を見た。母親にその夢の話をしたら男の子を二人続けて産む胎夢だと言われ、その通りに男の子二人を続けて産んだ。

三番目の子を産んだとき、仲人の人が葬式に出て家に遊びに来た。それから子供が顔を真っ青にして泣き出したので、姑が水を持ってきて仲人の不浄を清めて謝り、しばらくしてから子供の泣き事が止まった。子供が産まれて一週間ぐらいは、葬式など不浄なところに出ない。また、穀物などを家の外に持ち出さない。不浄をみた人は出産した家に行かない。子供にその不浄が移されるからである。産神(帝王お婆、三神)はもともと欲深いので穀物などを家の外に持ち出すと妬み、次から子供が生まれなくなるからである。小学生の時、友人がしばらくお弁当をもってこ

なかった。その理由は母親が弟を産んだからである。子供が産まれてワカメや牛肉を買いに行く時、お金は持っていても穀物は持って行かない。

安産するために陣痛が始まった頃、生卵を飲んだり、安産した人が産婦のお腹を左から右のほうに何回かまたがったりした。子供が生卵のようにすんなり生まれるからである。

昔は妊娠すると、男女関係によるものとしてとても恥ずかしく思い、人の前ではつわりのあること、妊娠したこと、お腹が大きくなったことは全部隠した。また、陣痛が始まって痛くても人に言わない。人に分かれると難産するからである。しかし、最近は妊娠したことを大きなお祝い事のようにあかるさまに威張る。出産準備は姑がワカメ、薪、お襦袢、うぶき、米などを用意した。一番目の子が男の子だったのでそのうぶぎは試験や訴訟をおこした時、身につけていくと縁起がいいといわれたので保管しておいて子供の受験のとき服の裏につけてあげた。

<事例5>

李貞愛は1941年生まれの専業主婦で、慶尚北道慶州出身である。胎夢の話は人にするものではないといわれてきたので一度も話したことはない。知人が竜の胎夢をみて自慢していたのでその子は偉くなるかなと思っていたが、そうでもなかった。それで胎夢の話はしない。胎夢でトラ、竜がみえると大夢で、大夢をみるとその子はえらくなると言われた。

妊娠した時、海鞘、タコを食べるとそのような子供が産まれると思って食べなかった。昔の服はポケットが付いてなかったので服と胸の隙間にもものを入れるが、妊婦は服と胸の隙間にお金を入れると、産まれる子が泥棒になる。妊婦が気を荒く怒ると子供の性格も荒くなる。

産後の三週間は辛いもの、冷たいもの、硬いものを食べない。また、冷たい水には手を入れず外にも出ず暖かい部屋で身体を暖めながらワカメスープを食べた。産後一ヶ月間はお風呂に入らなかった。しかし、近頃の若い産婦は産後なのに身体を暖めずベットで横たわる。

子供四人とも病院で産んだ。それから国の家族計画政策によって産児制限をした。当時は子供を産んで次の日に退院した。その時、タクシーに乗って男の子だとタクシー運転手は縁起がよいといい、タクシー賃を産神膳に置くよう返してくれた。一番目の子を産んでお産の休養は実家でしたので、実家で三週間産神膳を用意したり、注連縄をかけたりした。産神膳には乾燥させたワカメ、水、米、糸、タクシー運転手からもらったお金を供えた。その時、産神膳は厄神のない方位を選んでおいた。毎週親戚や近所の人を呼んで御馳走でもてなしをした。三週間目は母親が孫を負んぶして婚家に戻り、婚家の親戚や近所の人に御馳走でもてなしをした。その時、呼ばれた人は子供の長生きを願い、糸をもってきてくれたり、米一升、酒一本を持ってきた。二番目の子からは注連縄をかけるのをやめた。友人や親戚が病院にきたからである。

うぶぎは母親が用意してくれた。一番目の子が男の子で、その子に初めて着せたのは未だに保管している。臍の緒も王家では精巧にして壺に入れて土の中に埋めて保管しておいた。そのうぶぎは子供が受験に行く時、畳んでカバンの中に入れてあげた。一番目の子のうぶぎは、長寿した

爺さんの服で作ってあげると長生きするといわれ、母親がそのような爺さんの外套のおくみでうぶぎを作って着せた。二番目の子からは市場で買って着せた。長男の子が産まれたとき、長男に着せたうぶぎを病院にもっていったが、長男から迷信だと断わられてしまった。昔は出産するのにかかる費用は約3千ウォンだったが、今は50万ウォンかかるという。

<事例6>

金必男は1942年生まれのプロフェッショナル主婦で、慶尚南道統営出身である。子供三人の胎夢は母親と彼女自身がみた。母親がみた息子二人の胎夢は、ブタ二匹が部屋に入ってくる夢で、娘は貝を拾う夢だった。彼女は息子の時はヘビがうようよしたり、トウガラシを狩る夢で、娘は時々死んだ魚の夢だった。流産の前はヘビがあっちこっちに彼女を避けて逃げていく夢だった。また、見知らぬ男性がヘビ二匹の尻尾を持って彼女に嘔ませようとしたので怖さのあまり近所の奥さんに嘔ませる夢をみた。近所の奥さんは子宮手術後、子供が出来なかったので彼女からヘビの夢を買い、男の子二人を産んだ。人から夢を買うとその夢が買い手の夢になるので不妊で悩んでいる人々から胎夢を頼まれたが、夢は簡単にみるものではないので困っていたことがある。

本来、女は傷んだもの、切り残った隅っこもの、端のものを食べるが、妊娠したときは形がきれいなものや四角できちんとしたものを食べる。アンコウのような兇相なものは食べない。アヒルの肉は手がくっつくので食べない。果物は新鮮で形がきれいなものを食べる。縁がかけている茶碗は縁起が悪いので使わない。篩はまたがない。塀をまたがったり、上着やスカートのすそでものを包んだりしない。産まれた子が泥棒になるからである。人の食べ物を食べたり、障子の破れ穴で人を見たりしない。子供が貪欲な人になるからである。そのため、妊娠した一年間は祈る心で、心の丈を尽くして清らかな心を持ったなければいけない。

妊娠した時は生き物を殺すと死産児を産みかねない。母親は12人の子を産んだが、その中一人は死産児を産んだ。母親が産月に近づいた頃、父親が狩りに行ってタヌキ一匹をとってきたため祖父から怒られた。父親はそのタヌキを飲み屋でお酒の摘みにし、祖父にはタヌキを生かしてあげたと嘘をついた。しかし、母親が出産する時、何回も気を失うほど難産をした。父親は怖くて家の後ろの山のところに隠れて家の煙突から煙が出ると子供を無事産み、煙がでないと産まれなと思っていた。しかし、祖父が父親を探したので家に戻り、産婦のいる部屋の前でどげざをして一生懸命に謝り、祖母から水をかけられ不浄をはらった。それからやっと意識を戻した母親は子供を産んだが、死産児だった。

出産後一週間が過ぎるまで釜の穴を直したり、釘を打ったり、あるいは食べ物を炒めたり、揚げたりしてはいけない。

兄の子が産まれた時、壁に掛けておいた額縁が落ちて兄が釘を打ち直そうとして母親が帝王お婆(産神)が怒るとやめさせた。しかし、兄は「私が帝王(産神)であり、かつ子供の母親が帝王(産神)なのに何が心配」といい、母親の言葉を見做して釘を打ちなおした。それから兄は目

が霞んでみえ、病院に行っても治らなかったのが母親が兄が打ち直した釘をとり、その場に塩をかけて不浄をはらってから帝王お婆（産神）に水を供えて謝り、一晚寝てからきれいに治った。

夫の弟は村長で、村の忌まわしい出来事には全部顔を出さなければいけなかった。四人目の時、やっと男の子が産まれたので友人たちに生男酒をおごっているところ、お葬式があった。姑は子供が産まれてハンチル（一週間）も過ぎてないので、チル（約三週間）が終わってから顔を出すようにと言った。しかし、夫の弟は村人のお葬式に出て墓を掘って入棺するための穴に入って大きさまではかり、埋葬して家に帰ってきた。その時、子供が顔を真っ青にして泣きだしてその日の夜、死んでしまった。そのため、帝王お婆がいけないと言い切れない。また、帝王お婆は欲深いので子供を産んでチル（三週間）が終わるまで穀物などを家の外へ持ち出すのを嫌う。チル（三週間）の間は竈やトイレを掃除しないので産気づく直前に掃除しておいた。

長男を産んでからは、産神お婆に家は商家で様々な人の出入りがあるからご機嫌悪くしないよう予め謝っておいたので喪主が来て何も問題もなかった。しかし、葬式があって葬布契（葬式費を出し合うための頼母子講）から米をとって帰ってからしばらくして腹痛が起こった。姑が水で三回私の身体の不浄を清めてから腹痛が治まったので三神（帝王お婆）は本当に靈験がある。お産の世話は姑がしてくれた。子供が産まれると三神（産神）膳を用意し、一日三回ワカメスープや白飯を産神に供えてから産婦に食べさせる。出産祝い金が入ると三神膳に供える。病気になる人、目や耳が不自由な人が来ると姑は三神膳に水を供えて子供に移さず元気な子になるよう願う。産婆はいるものの幾つかの村おきに一人いるくらいで、邑や面所在地ではないと産婆に頼むのが難しく、姑か村の老婆が出産の世話をする。乳はきれいなところか煙突に捨てる。煙のようにお乳がよく出るようにするためである。

出産の際、夫がなくて産婦がなかなか子供を産めない時は夫の服を産婦にかけてあげると良い。胎盤は藁に包んで川に捨てるか燃やす。川や海の近くでは藁に胎盤を包んで石をつけて沈ませるか、あらぬかで燃やす。胎盤を燃やす方位は「ソン」と「大將軍ソン（厄神）」がないところにする。「ソン（厄神）」のある方位で燃やすと次から子供ができないからである。

名前は子供の祖父が付けたが、現在は名前を付ける専門家に頼む。昔は、子供がはしかなどの病気でよく死んだので丈夫で長生きを願う意味で、イヌの糞、岩、棚などのように汚く丈夫なもの名前を付ける。母親は12人の子供を産んだが、3人だけ生き残った。

<事例7>

姜花子は1943年生まれで、夫婦でスーパーをやっている。出身は慶尚北道大邱である。彼女は子供3人の胎夢をみた。長男は夫以外の男と寝る夢をみた。起きてもその人の顔を生々しく覚えていたが、とても恥ずかしく人には夢の話ができなかった。しかし、夫以外の男と寝る夢は男の子の胎夢だと聞いた。長女は竹林で太い竹の筒をもって立っていると可愛く小さい二匹のマムシが持っていた竹の筒を登って行った夢をみた。次男は緑色の水が満ちあふれているせせらぎに座っ

で洗濯をする夢をみて母親に話すと、男の胎夢だと言われた。黄土の水だと女の子の夢だそうだ。

子供の3人の胎盤は全部燃やした。最初、胎盤は川に捨てた。川には捨てられた胎盤が多かった。しかし、当時は肺病患者が多くて薬がなかったので薬として川に捨てられた胎盤を拾い、刺身にして食べるのをみてから全部燃やした。昔は、子供の乾燥して落ちた臍の緒を保管して置いて子供が驚風を起こした時、それを煮た水を飲ました。

名前は行列(血族の傍系に対する世数関係を表す語)に合わせて姑が作名家(名付け親)に頼んで作った。孫も作名家に頼んでこの行列に従って作ろうとしたが、縁起のよい名前がなくてしかたなく族譜の行列とは関係ない名前を作ってもらった。今年はトラ年なのでトラ年の最もよい時間の朝一時十十分に合わせて孫を産ませた。病院で産むので、医者に頼んで星めぐりのよい時間にあわせて分娩してもらった。子供を産ませてもらった時間と行列にあわせて名前を作ったが、名前も一生の運を左右するのでよい名前がなく、族譜には行列にあわせた名前を載せ、日常生活で呼ぶ名前はそれと関係ない名前にした。嫁は長男が一人いるが、トラ年の今年に子供を作るとウサギ年の来年(1999年)には女の子が生まれると言われたので、今年子供を作らないことにしたという。

<事例8>

権京姫は1944年生まれで、一人で布団屋をやっている。出身は慶尚北道醴泉である。子供四人と孫一人の胎夢は全部夫がみた。夫は会社員で二人以上を産むと特別手当が出ないので子供二人を産んでから避妊をしたが、子供ができて息子二人、娘二人を合わせて4人を産んだ。

長男は、トラが現れていくら逃げても追いついて来て夫の下半身を噛む夢をみた。夫の胎夢も姑がトラに肩を噛まれる夢だった。長女は家畜市場に行ったらヒヨコを数十匹抱えているメスのニワトリがとても可愛かったので一銭も値切らずヒヨコまで買ってくる夢をみた。次女はどこか出かけて行く道ばたに青カボチャがいっぱい吊り下がっているのに一カ所だけ黄色いカボチャが吊り下がっているので種にするため刈ってくる夢をみた。次男はトウモロコシ畑で実が生っているトウモロコシのほとんどまだ若かったが、一カ所だけトウモロコシの髭がとてもよかったのでとってきてみたらよく熟れており、実がぎっしり入っている夢をみた。孫娘は、ドジョウがいっぱいいる様子だが、なかなか捕まれなくやっと一匹捕まってみたら髭のよい大きなドジョウの夢だった。

子供はただでできるものではない。幼い頃サランパン(広間)で遊んでいた時聞いた話によると、酔っぱらって子供を作るとその子はまぬけになり、雷がなるととき子供をつくるとその子は癲癇にかかる。産婦は酔っぱらった人の顔はみない。結婚式や葬式には大勢の人が集まるので行かない。そして、乱れた心をもたないよう常に心かける。

妊娠した時、ニワトリを屠ると首のねじれた子が産まれる。へびも殺さない。生まれる子供がへびのまねをするからである。コンクック(牛肉をよく煮込んだ汁)はあまり食べない。子供が

足を患うからである。ウナギ、雷魚は食べない。ウナギ、雷魚を調理する時、熱い釜にゴマ油をたっぷり入れて生のものを入れると魚が熱くて飛び回り、自然に炒められたところに水で煮込む。その汁を産婦が飲むと、子供の身体が炒められた魚のような形になるからである。妊婦が薪で煮炊きをする時、背負子の杖を火搔にすると、六指の子が生まれる。

一番目の子のお産の世話は姑がした。家ごとに生まれた子供ごとに三神がそれぞれ違う。そのため、同じ屋根の下で一緒に子供は産まない。また一年に二回以上お産の世話をしない。三神が妬むからである。出産後、三週間は葬式など不浄なところに行かない。二番目の子を産んで一週間もたった頃、夫が理髪をして家に戻ったら急に子供が泣き出した。姑は夫が理髪をしたせいだと言って夫をどげざさせて三神に謝まり、水で夫を清めると子供の泣き声が止まった。そのため子供が産まれると髪や爪を切らない。

注連縄は舅がかけた。男の子はトウガラシと青松の枝と炭を、女の子は炭と青松の枝を挿しておく。長男を産んだときは三週間、姑の世話により暖かい部屋で一日6、7回のワカメをスープを飲んで休養をとった。二番目の子からは婚家を出て生活したので、夫がお産の世話をした。

子供のうぶぎは袖を長くして百日目になるまで手が見えないようにした。手が見えると、大きくなって人のものを盗むからである。一番目の男の子のうぶぎは受験の時、こっそり本人の服に入れてあげると縁起がよいと言われた。

臍の緒は男の子はよく働けるよう鎌で切り、女の子は針仕事がうまくなるようハサミで切った。胎盤は姑が厄神のない方位を選んで庭で燃やし、竈の奥に入れてしまった。二番目、三番目の子は夫が胎盤に重い石を付けて海に捨てた。胎盤には赤色と白色があるが、赤色の胎盤は縁起がよい。赤色の胎盤の子は昔だと科挙に合格する運があると見なし、その胎盤を燃やさず丁寧に乾燥しておいて本人が科挙試験のため上京する時、こっそりと服の中に隠してあげると合格する胎盤だと言われた。また、赤色の胎盤に臍の緒を三回巻かれて生まれると縁起がよいと言われた。それも胎盤と同じく燃やさず科挙して行く時、入れてあげたという。

<事例9>

李慶淑は1946年生まれの専業主婦で、慶尚南道蔚山出身である。子供ができなくて占い師に行ったら三神を授かりなさいと言われ、縁起のよい日を選んでその夜か夜明けの頃、名山の谷間や川沿いの岩の前でクリ、ナツメ、リンゴ、カキなどの果物と米、ワカメ、糸を供えて占い師を通して願ってもらった。占い師が米の上に糸を解いて行くと糸に米粒がくっつく。その米粒はスカートでもらって食べる。それを三神を授かるという。また、牡丹の花、庭漆の実、蓬、益母草などを煮た汁を飲んだり、漢方薬を飲んだりした。脱穀した後の稲束に残っている米を集めて炊いたご飯を夫と一緒に食べた。また、三回結婚した人の家の包丁を盗んできて三つの斧を作って身につけたこともあったが、子供ができずあきらめて養女を入れた。後妻を向かい入れたり、養子を入れたりすると三神お婆が妬んで子供ができる。出産の場で子供を産んだばかりの人の下着を着る。

<事例10>

黄秋子は1948年生まれのプロ主婦で慶尚北道陽南出身である。果物、ドジョウを拾ったり、スカートに包んだりする夢をみると女の子で、ダイコン、サツマイモを盗んだり、子イヌやブタの夢をみると男の子だった。大きい青大将が人の親指を噛む夢は偉くなる男の子を産む夢である。

注連縄は、男の子はトウガラシと炭を、女の子はワカメと炭をさして三週間かける。三神(産神)お婆には三週間、毎週ワカメスープを供える。三神(産神)膳には姑が茶碗一杯の米と水、乾燥したワカメ、糸を供えて子供が無病長寿でよく食べてよく寝、多福な子で成長するよう祈った。孫には私がやってあげた。子供を産んでから寝返りすると死ぬと言われた。子供が生まれたその月は、父親は不浄な家や葬式に行かないし、生き物を殺さない。子供に不浄のため祟るからである。この期間は同じく子供が生まれて産神を祭ってる家は行かない。三神が妬むからである。米(穀物)、トウガラシ、お金の取引はしない。乳の出が悪くなるからである。また、産後は骨が緩くなるので暖かいものをよく食べ、暖かい部屋で横になって休養をとる。

うぶぎは一番目の子で男の子のものは、保管して置いて受験の時や裁判の時もっていくと縁起がよい。うぶぎの結び紐は糸にしてあげると長生きする。乳の出が悪いと谷間のせせらぎの所のきれいな水を汲んできて三神(産神)膳に供え、その水で産婦の乳を洗いながら子供がいやがるほど飲んでも残るほどの母乳がよく出るよう願う。三神婆は霊験があるので、何もかも願いを聞いてくれる。子供の胎盤は藁に包んで産後三日後に舅が燃やした。

男の子を授かるためには寺に行って夜明けまで綺麗で冷たい水で身体を洗って祈る。それから山神閣に行って願う。山神閣には子供が病気をしても治るのを願いに行く。子供を授かるためには寺に行って願う一方、身体を暖める漢方薬を飲む。

<事例11>

李美淑は1970年生まれのプロ主婦で、釜山出身である。夫が結婚前、大きな青大将三匹が横たわっている夢をみ、目がさめても夢が生々しく目に焼き付くので家族に夢の話をしたら結婚していた夫のお姉さんがその夢を買った。それから男の子を産んだ。青大将、トラは大きいのが男の子の夢であり、小さく可愛いのは女の子の夢である。一歳の娘の夢は舅と姑がみた。舅は小さいヘビの夢を、姑は可愛いカメの夢をみた。

病院で長女を産み、実家の母親から出産の世話をしてもらった。三神膳は婚家で用意せず、胎教はお産関係の専門雑誌に書いてあるのを頼りにし、本を読んだり音楽を聞いたりきれいなものをみると説明してあげたりした。

夫がコーヒーを多く飲んで朝3時以後に夫婦関係をもつと男の子が生まれる。また、夫婦関係をもつ回数を少なくして排卵期に合わせると男の子が生まれる確率が高いという。

以上のように、60歳代から20歳代までの女性11人の事例をとおして、出産前後における禁忌事項やしきたりを中心に韓国のお産のあり方について述べてみた。

Ⅲ 胎夢による胎児の性別占い

生まれてくる子供の性別への関心は自然であるが、とくに韓国は胎児の時から性別への関心が強く、妊婦の体形や好物の食べ物、夢など様々な形で胎児の性別占いをする。たとえば、お腹が大きくなったとき、お腹が平たく広がっていてヒサゴをふせているような形をすると男の子で、臍のところがふくれあがって茶碗を伏せておいたような形をすると女の子だという。また、妊婦の後ろ姿をみたとき、腰の線がほとんどない場合は男の子であり、腰の線がきれいな場合は女の子だという。その上、妊娠してお腹が大きくなったとき、妊婦が横になると胎児も一緒に横になり、天を仰ぐと一緒に仰ぎ、お腹が横になっても座っても楽なのは男の子である。しかし、妊婦が横たわりたい方向と反対になり、横たわっても座っても楽にならないのは女の子であるという。さらに、妊婦が肉類を好んで食べるとその胎児は男の子であり、果物や野菜類を好んで食べると女の子だという。

その他、マッチの数で胎児の性別を占う方法もある。たとえば、マッチを夫婦の年齢を合わせた数から三つずつつまみ出して三つ残れば、男の子を望む家は男の子を、女の子を望む家は女の子を産む。しかし、残りのマッチの数が一つだと男の子であり、二つだと女の子であるという。

これら胎児の性別占いの中でもっとも注目されるのが夢による胎児の性別占いである。

韓国では赤ん坊を産むことは単に性行為の結果ではなく神命とみなし、「(神から)もらった」と表現する。胎夢は神の意としてその代表的な例である。胎夢への関心は非常に高く民間信仰にまでなっている〔Kim Je-II 1997: 20-21〕。

胎夢とは、妊娠する前に夫婦または両家の身内の誰かがみる夢をいう。この夢は目が覚めてからも記憶に鮮明に残る。胎夢の解釈は年輩の女性がするのが一般的で、その夢によって生まれてくる赤ん坊の性別を推測する。ことに、〈事例5〉のようにブタ、トラなどの夢を見た場合、よい夢と見なし、人に言い漏らすと効き目がなくなるため、その子が大人になるまで黙っているという。偉大な人物の伝記には必ず胎夢が触れてあるほどである。

胎夢で胎児の性別を占うのは韓国だけでなく、東南アジアでも行われている。松岡によると、東南アジアでは赤ん坊が生まれるまでに夫婦は夢で男女の別を知る。男の子なら宝物、金、宝石、お金などの夢をみるのに対し、女の子なら鉄、一センチ硬貨やその他のありふれたものを夢みるとされている〔松岡 1991: 12〕。

しかし、韓国の場合は先述した事例をまとめてみると、胎夢の対象は、日常生活でよく目にする動物と植物がほとんどである。ヘビ、青大将、トラ、ブタ、ツルのような大きな動物や赤のトウガラシ、クリ、サツマイモ、ナツメ、ダイコン、トウモロコシなどの植物、緑にみえるほどの清水、夫以外の男と関係する、果物の木を盗んでくるなどの夢をみると男児が生まれるという。ことに、クリやナツメは、結婚式の中での新婦が舅と姑に初対面の儀式の際には絶対に欠かせないものであり、男児の多産の象徴である。一方、ヘビ、カメ、ブタ、トラでも形が小さくて可愛

い動物、緑(青)のトウガラシ、ナツメ、カボチャ、カキなどの植物、黄色い水などの夢をみると女兒が生まれるという(表1)。このように韓国の胎夢による性別占いは、形が大きくて力の強いものや赤色を示すものなどが男児の象徴とされ、形が可愛いかったり緑(青)色を示すものが女兒の象徴とされる。

IV お産のしきたり

1 出産前後の禁忌事項

子供は単にできるものではないので、妊娠から出産まで妊婦は心身を慎み、食べ物や行動などにことに気をつける。たとえば、<事例1・5・6・8>によると鴨、タコ、カニなどのような形が変わったものや腐ったものは食べてはいけない。餅や果物は形がきれいなものを食べ、縁が欠けていない茶碗を使う。篩をまたがない。篩は馬の尻尾でつくられている。馬は十二ヶ月になって子馬を産むので篩をまたがると出産が遅れて難産するからである。壁を越したり、上着やスカートのすそでものを包んだりしない。そんなことをすると子供が泥棒になるからである。結婚式や葬式などの大勢の人が集まる場所に行かない。大勢の人の中には、酔っぱらった人、不浄な人などがいる。そういう人を見ると心が乱れるからである。

妊婦が産気づくと、家族のだれかは竈の灰やトイレの汚物を取り除いておく。それを子供を産んだ後にすると、お産の神様の機嫌を損なうからである。陣痛が始まると、軽いお産だった人を呼び、横たえている妊婦のお腹の上を左側から右側に三回乗り越させたり、夫が妊婦を負んぶしてあげたりする。Pe Do-Shikによると、安産した人の呪術的な力や夫の力を借りて安産にしようという考えである。また、左から乗り越させるのは、左の子宮で男児を懐妊するからであり、三という奇数は男性を象徴する吉数として、いずれも安産と男児を願う意味がある。さらに、生卵を飲ませたり、妊婦が頭を洗って髪を梳いたりする。それは卵や髪のつるつるとした状態が産道から赤ん坊をすりと出させることを連想させることから始まった〔Pe Do-Shik 1993:330-331〕。

出産には、主に姑あるいは母親、村の老婆が世話をする。子供の臍の緒は男児は鎌で、女兒はハサミで切る。柳岸津によると、女兒が生まれたら次の子は男児が生まれることを願い、女兒の臍の緒を鎌で切るという〔柳岸津 1997:208-209〕。鎌は長寿を願う意味もあるが、男児はよく働くことを願って鎌で切り、女兒はお針の手際がいいことを願って鋏で切る。両方とも良い暮らしを願う意味が含まれている。このように赤ん坊の臍の緒を切るときにも性差が表れ、男児信仰が見えかくれする。胎盤は藁で包んで川に捨てるか、大きな河や海に近いところなら、重い石をつけて沈ませる。あるいは荒蕪の中で「Son」^(註2)のいない方位を選んで燃やす。「Son」がいる方位で胎盤を燃やすと、次の子が生まれないからである。

2 三神（産神）信仰と注連縄

子供が産まれると、姑は産婦の部屋に三神（産神）を祭るための「三神膳」を用意し、舅または夫は玄関に注連縄をかけておく。三とは胎を意味する言葉である〔李能和 1973：206〕。三神は子供の出生や成長、禍福吉兇、寿命などを左右するお産の神であり、産神お婆さん（帝王お婆さん）と呼ばれている。不浄なことが起こった時は、きれいな水を供えて三神に願うとよく適えてくれるという。

しかし、三神は欲深で嫉妬深い神なので、三神がいる「三七」の間（三週間）は家からもの、とくに米などの穀物を外に持ち出したり、取引したりしてはいけない。家からものや穀物を持ち出すと三神が家を出てしまい、妊婦や赤ん坊に福が無くなり、赤ん坊の命が短くなったりするなどの厄が起こるからである。また、子供や家ごとにそれぞれの三神があるため、同じ屋根の下で子供と一緒に産まないし、一回出産の世話をした人は一年以内に二人以上の出産の世話をしない。

「三神膳」は「Son」のいない方位に置き、初のワカメスープと白飯を供える。そして、三神に供えたものを産婦に食べさせる。産婦は、神が食べたものを「飲福」することで、神の力をもらうと考えられている。「三神膳」にはワカメ、米、水、糸、臍の緒を切るとき使った鎌やハサミや、家に入って来るものはすべて供えておく（写真1）^(註3)。それから、七日置きに白飯とワカメスープを三神に供えて子供が多福で無事成長することを願う。「三七」までの間祭ってから「三神膳」は片づける。その時、供えた米はご飯にして産婦に食べさせ、水はきれいなところに捨てる。そうすると、妊婦の乳の量が増える。そして、三神を祭る期間は、親子に不浄なことが起こらないようにと、家族は葬式に行かないし、生き物を殺したり、食べ物を焼いたり、揚げたりしない。壁には釘を打たない。

注連縄は聖世界と俗世界を分ける結界である。つまり、子供の生まれた家は聖なる空間となり、家の外は俗の空間となる。注連縄は病気の鬼神や家族以外の人出入りによる不浄から親子を守るためにかけられる。さらに、注連縄は子供の性別を外部に示すものでもある。男児の注連縄には赤いトウガラシ、炭を三つずつ（写真2）、女兒のそれにはワカメ、炭、青松の枝を三つずつ交互に替えて刺しておく（写真3）。柳岸津によると、赤いトウガラシは男根の象徴であり、赤色は辟邪の信仰によるものである。松の青色は強い生命力と貞節の象徴になり、針の葉も辟邪の象徴となるからである。炭は韓国の伝統社会ではすべての聖域の表示として、消毒用や除毒用として用いられていた〔柳岸津 1997：211-244〕。

3 子供の成長の区切り

子供の生後から三週目、百日目、一年目を迎えると、隣人と親戚を呼び、子供の無事成長を願ってお祝いをする。こうした節目の日を、「三七」、「百日」、「Dol (돌)」という。

「三七」は成長の一区切りで、三と七は吉数である。生後三週目になると、産婦は軽い仕事ができるほど回復し、子供の臍も癒える頃であり、「三七」の間は親子が心身の休養をとる期間にもなる。産婦は暖かい部屋で姑か母親の世話を受け、ワカメスープと白飯を食べ体を暖める。ワカメスープは、血のめぐりや母乳の出をよくするため、産婦の休養に欠かせない。

「百日」は子供の首が据わる頃である。医学が未発達の間には嬰兒の死亡率が高かったため、誕生から百日の間生きていれば喜ばしいことであった。子供の長生を願って、産着は長寿のお爺さんの服で作ったものを着せるが、手が見えると泥棒になるからといって、「百日」の間は袖を長くして手が見えないようにした。ことに一番目の男児が着た産着は縁起のもので大切にす。裁判の時や受験の時にこっそり本人の服の中にぬいつけたり、竈の上に足袋と一緒に掛けておくと、縁起がよいといわれる。また、柳岸津によると、産婦は産褥熱などの後遺症になりやすいが、百日が過ぎれば回復できたので、成熟と完全を意味する百日を記念して祝いをする〔柳岸津 1997: 210-212〕という。

「Do」は初誕生の祝いとして、母子の無事を祝い、子供の長寿と福祿を祈願する意味がある〔柳岸津 1997: 211-244〕。中国や日本と同じく、この日は子供に新しい服を着せ、飲食物及びお金、筆、糸などを子供の前に並べ、何を取るかによって子供の職業や性格を占う。ことに韓国では男児の初誕生祝いを重んじ、女兒は省略することもあった。

V 男児信仰にかかわる習俗

上述の三神信仰の担い手が女性であれば、男性は祖先祭祀の担い手である。三神信仰が迷信化する一方で、祖先祭祀はいまだ一家の重要なセレモニーとされている。その担い手になる男児を産むことは、その家の世継ぎを得るという意味を持ち、その重要な役を果たすことで嫁の立場もよくなる。それ故、男児に対する願望は強く、そのための努力は涙ぐましいものである。〈事例 9〉にみられるように、漢方薬あるいは臍の緒(胎盤)、牡丹の花、庭漆の実、蓬、益母草などを煮た汁を飲む。脱穀した後の稲束に残っている米を集めて炊いたご飯を夫と一緒に食べる。寺か、山や河の岩の所で、占い師が定めた日の夜あるいは夜明け頃に、水で身体を清めてひたすら男児が授かれることを願う。これを「三神を授かる」という。そのとき供えるものは、Pe Do-Shikによると、男性を象徴するクリ、ナツメ、干し柿、干したタラなどと、生産の源を象徴するワカメ、水などである〔Pe Do-Shik 1993: 310〕。また、三回結婚した人の家の包丁を盗み、それで三つの斧を作って身に付ける。男児をたくさん産んだ人の出産の場で、その人の下着を着る。男児の三神膳に供えたワカメスープを飲んだり、その米をもらって炊いて食べたりする。

結婚式のとき新婦が笑うと女の子が生まれるといわれる。韓奎良によると、これは女の子が生まれるより男の子が生まれることを期待するからであるという。男の子を願う心は父より母の方が強い。嫁入りした女性が婚家のなかで自分の立場を固めるための一番てっとり早い方法は男の

子を産むことだからである。父系の世代が続くためには女性は男の子を産まないといけない。男の子とくに長男は父母が死んだ後でも祖先祭祀の実行を通して孝行すべきであるとされているので、男の子を産んだら死後まで安定したことになるのである〔韓奎良 1999: 29-42〕。

このような男児信仰は今日でも根強く^(註4)、坂元によると、韓国の諺には「息子を産めぬ女は涙の洗濯物が尽きることがない」をはじめ、男児の必要性や重要性を説く内容のものがいくつもみられる。また、婚姻儀礼のとき、舅と姑がその嫁の広げたチマ（スカート）に「息子は沢山、娘は薬味」と唱えながらクリ、ナツメの実を投げて多産を祈る習俗がある〔坂元 1999: 46-47〕。祖先祭祀のときに供え物としてクリ、ナツメが欠かせないのもやはり代を続けて祖先を祭る男児を沢山産めるよう、祖先に祈願する意味である〔柳岸津 1990: 96〕。この他に形が長い卵を煮て台所でこそっと一人で食べる。牛の囊腫を煮て食べる。長いダイコンを食べる。男の尿に卵二個を二ヶ月つけて煮て食べる。妊婦の布団の下に斧を入れておく〔Pe Do-Shik 1993: 328-329〕など、胎児の性を転換するため、呪術を行ったり、高麗人參や漢方薬を飲んだりする。

さらに、女兒の誕生は薬味程度で十分という意味で女兒の名前を「末子」「末順」「薬味」と名付ける。男児の誕生を強く願うときは女兒の名前を「順男」、「必男」、「後男」、「後子」などに名付けて男児が生まれることを願う〔柳岸津 1990: 233〕。

VI おわりに

これまで述べてきたお産のしきたりや三神信仰は50歳代以上の女性たちによって主に行われてきたものである。ほとんどの20～30歳代女性は、病院で出産することにより50歳代が行ってきた三神信仰を祭ったり、注連縄をかけたりしない。また、産後も身を暖めたり、子供の長寿を願ううぶぎを着せたりなどもしない。むしろ、医療技術の発達と近代化の影響によりこれらは迷信とみなされ、現在ではほとんど行われなくなっている。つまり、出産は病院でするのが安全で洗練されたものであり、家で自然分娩するのは危険で粗野なものとして認識されるようになった。また、お産文化の伝達形態が親から子への縦軸ではなくて、病院や本、雑誌などによる横軸へと変わっているといえるだろう。

また、今日では男児出産のためのかつての苦勞も病院に行けば簡単に解決できる。医者の中にはこうした男児信仰を悪用して男児を願望する妊婦を騙して金儲けをする人もいる。一方、親の中には悪運を事前に防いでよい星回りに生まれることを願い、子供の出生時間まで調節して干支による、その年の一番よい時間に合わせて子供を産む努力がなされている。こうしたことが産婦に悪い影響を与えていない場合がないわけではない。

性別の鑑定による子供の生み分けは、自然な性別のバランスを壊す。坂元によると、1960年から1985年まで韓国の乳幼児人口の性比が年ごとに女兒に対する男児の比率の上昇傾向がみられ、人為的な操作の介在が容易に想像される〔坂元 1999: 46-47〕。つまり、近代医療は嬰兒の死亡率

韓国のお産文化（李 善愛）

を激減するのに貢献する一方、男児信仰に煽られ、胎児の命の間引きを手助けしているともいえる。近代医療が韓国のお産文化に与えた影響は大きい。その一方で、韓国のお産文化は近代医療のあり方にもかなり影響を与えているといえるだろう。

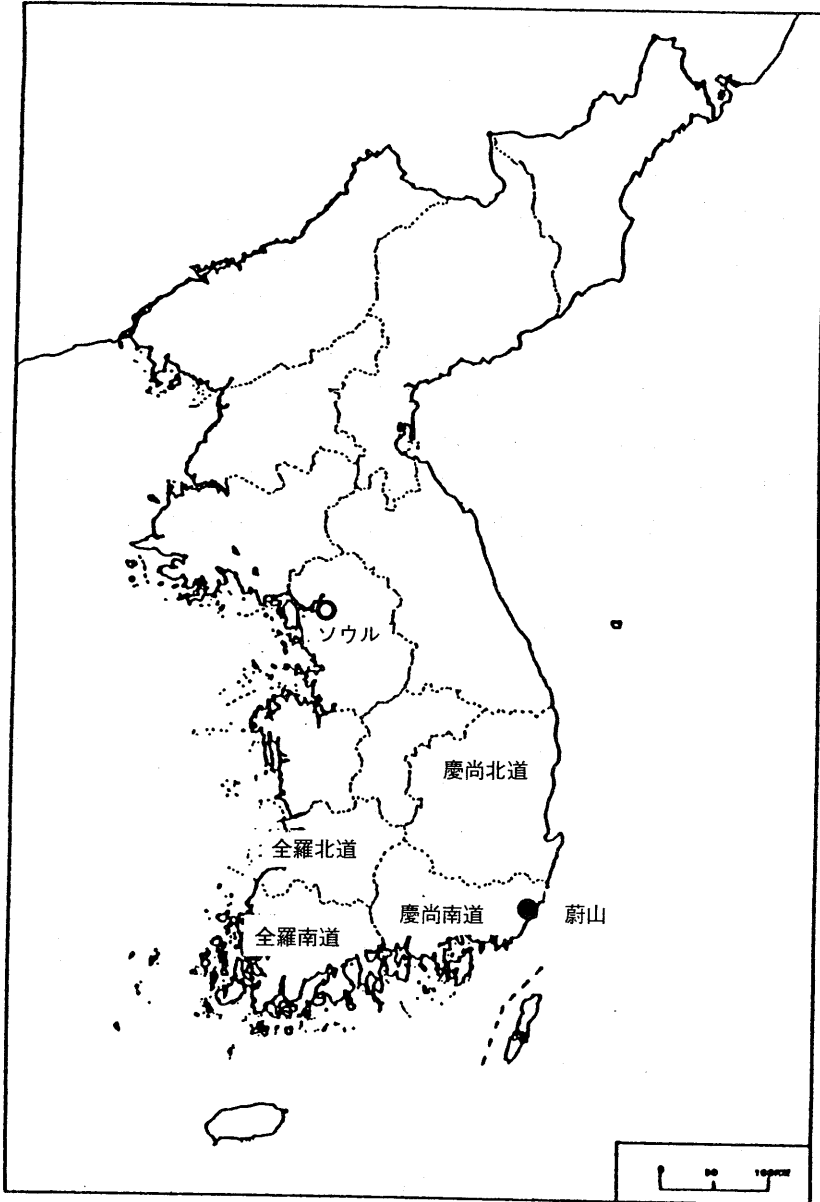


図1 韓国蔚山市位置図（●は調査地）

【注】

- (1) その内容は1998年12月、1999年6月に慶尚南道蔚山地域で出産経験のある女性11人（50歳代10人、20歳代1人）を対象に、約三週間行った聞き取り調査に基づいたものである。50歳代6人の女性たちは親睦契の契員同士である。夫の仕事関係で同じ社宅に住んでいた時仲良しの人たちが毎月会費を集め、順番に会員の家でお昼を食べながら互いの親睦を高めている。会員の冠婚葬祭の時は、一定の金額を出して助け合う。その他の4人は〈事例9〉の地縁、血縁関係にあるものである。また、事例における人名は仮名である。
- (2) 「Son」とは日数により東南西北の四方を回りながら人に害を与える鬼神である。他に「大將軍Son」という鬼神があり、三年に一回、「Son」と逆方向の北西南東に回りながら人に害を与えるという。両方とも厄神である。これらの「Son」が重なる時もその方位で胎盤を燃やしてはいけないという。厄神のある方位は日にちや三年ごとに異なる。一日と二日は東、三日と四日は南、五日と六日は西、七日と八日は北にある。しかし、三年おきに回ってくる大將軍厄神は三年に一回、北西南東の方向順にある。大將軍厄神がある方位には引っ越しもしない。
- (3) 〈写真1・2・3〉は調査した地域の方により復元してもらったものである。
- (4) 〈資料1〉は1999年12月1日、韓国の「The Hankyoreh」新聞に連載されている漫画家ホンスンウ(홍승우)の作品「ビビンタウン」(비빔툰)という漫評・漫画を筆者が日本語に訳したものである。この作品は現在も韓国社会が如何に男児を求める信仰が強いかをよく表している。

【参考・引用文献】

秋葉 隆

1993 『조선민속지(朝鮮民俗誌)』 沈雨晟(訳) 東文選。

韓 奎良

1999 「女性と結婚生活－韓国」 片山隆裕編 『アジアの文化人類学』
ナカニシヤ出版、29-43頁。

李 能和

1973 『朝鮮女俗考』 大洋書籍。

李 善愛

1999 「韓国のお産文化の現在」 『ペリネイタル ケア』18-10 メディケ出版、72-77頁。

イザベラ・バード

1998 『英国婦人の見た李朝末期 朝鮮紀行』 時岡敬子(訳) 講談社。

買惠萱、春日嘉一

1991 『日本と中国 楽しい民俗学』 社会評論社。

賀嘉、陳暉

1998 「産育の民俗」 宮田登、馬興国編 『日中文化交流史叢書 5 民俗』 大修館書店、
262-290頁。

ジュディス・ゴールドスミス

1997 『非西洋社会の女性たちが伝えてきたお産の文化：自然出産の智慧』 日高陵好
(訳) 日本教文社。

김 재일(Kim Je-Il)

1997 『우리 민속 아흔아홉 마당 1 (わが民俗九十九マダン1)』 한림미디어(ハンリムミ
ディア)。

松岡悦子

1991 『出産の文化人類学』 海鳴社。

배 도식(Pe Do-Shik)

1993 『한국민속의 현장(韓国民俗の現場)』 집문당(集文堂)。

坂元一光

1999 「アジアにおける子供のジェンダー韓国、タイ、日本の性別選好とその背景」
片山隆裕(編) 『アジアの文化人類学』 ナカニシヤ出版、45-57頁。

新村 拓

1996 『出産と生殖観の歴史』 法政大学出版局。

柳 岸津

1997(1990) 『한국 전통사회의 유아교육(韓国伝統社会の幼児教育)』
서울대학교출판부(ソウル大学出版部)。

表1 胎夢における男女の区別

項目	男児の場合	女児の場合
ツル	○	×
イヌ	○	×
サツマイモ	○	×
ダイコン	○	×
夫以外の男と関係する夢	○	×
トウモロコシ	○	×
ニワトリ (メス)	×	○
魚	×	○
カボチャ	×	○
柿	×	○
貝	×	○
青大将	大	(小)
へび	大	(小)
ブタ	大	(小)
トラ	大	(小)
カメ	大	(小)
トウガラシ	赤	青 (緑)
クリ	赤 (茶色)	青 (緑)
ナツメ	赤	青 (緑)
水	清水 (緑)	黄色
モモ	木のまま盗む	果実を穫る

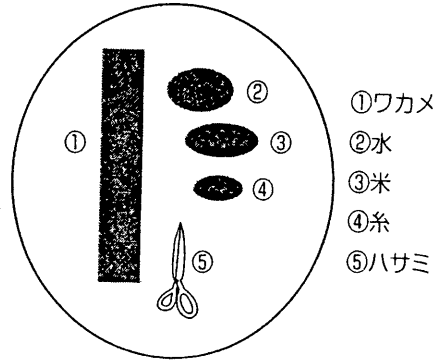
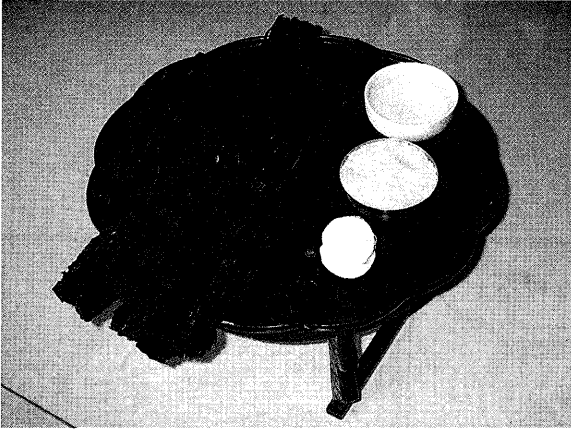


写真1 三神膳



- ①・③・⑤ 炭
②・④ トウガラシ

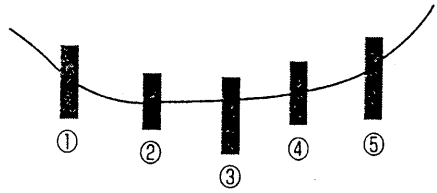
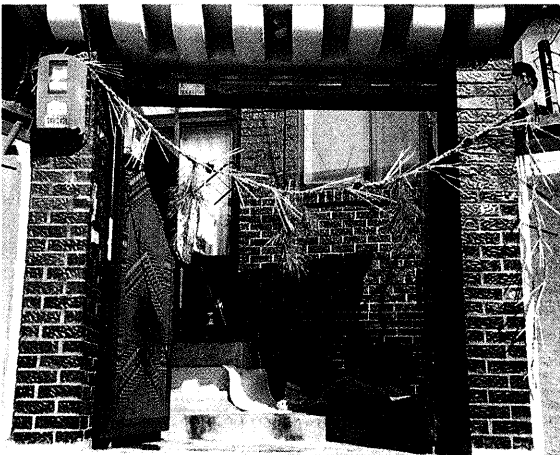


写真2 男児の注連縄



- ①・③・⑤ 松の葉
②・④ 炭

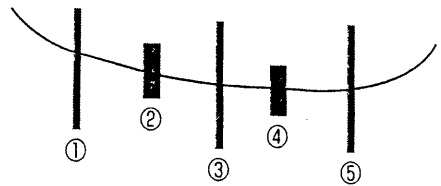
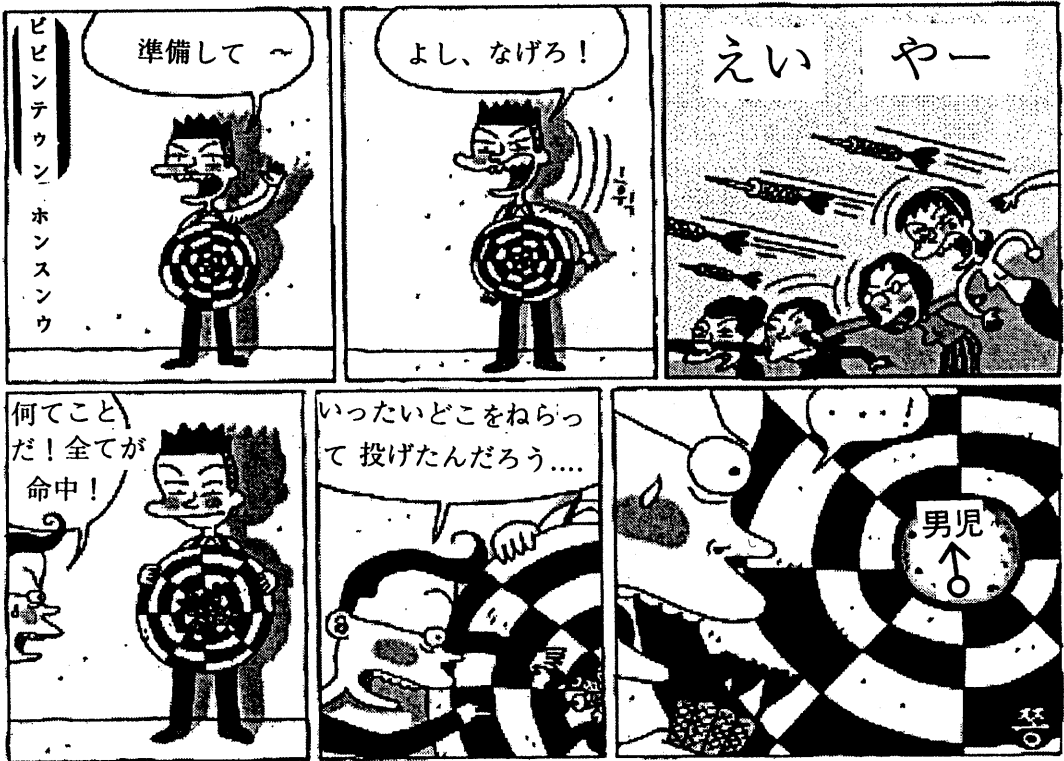


写真3 女児の注連縄

<資料1>



(1999年12月1日「ハンギョレ新聞」より)